

昭和が終わり、平成を迎えた頃、日本は人手不足の時代に入っていた。中小企業は経営を維持するため、親戚の力を借りても人手が欲しいと言われていた。当時は外国人労働者を雇うことも容易ではなかった。私は会社を発展させる責任者として、社内の変化と魅力づくりが必要と考えた。まず目をつけたのが制服である。当時、東京大学航空学科の教授が新聞のコラムで、教員が銀行や証券会社に就職し航空機メーカーに就職しないと嘆いていた。学生によれば、製造メー



カレンダー制服の思い出

大垣精工会長 上田勝弘

カーの作業服に魅力がないことが理由らしい。一方、大手銀行や証券会社は業務合理化のためコンピュータ導入を急ぎ、技術系学生を求めている。給料も良く、スーツで格好よく働ける。これが学生の本音だったのだらう。中小製造業ではスーツ勤務は難しい。冬物と夏物の2着支給だけでは魅力に欠ける。そこで、年間12着の制服を支給し、ファッション性も取り入れ、社内でデザインを考えて発表することにした。製造は地元の仕事に依頼し、前例がないため全国調査が必要となり、NHKが全国で調べたところ、社員約100人に毎月作業服を支給する例はなかった。大垣市役所でお披露目し、新聞に掲載された。「ズームイン!!朝!」をはじめ、NHKニュースでも取り上げられ、大垣発の「カレンダー制服」は全国に知られるようになった。宣伝費は一切かからなかったが、広告費に換算すれば当時で1億円以上の効果があったと言われた。私のちょっとしたアイデアが全国に広まったことは、今でも楽しい思い出である。